

Ⅱ 全体構想

第1章 都市づくりの理念と将来都市像

1-1 都市づくりの基本理念

(1) 基本理念

総社市は、高梁川やその流域に広がる吉備平野、吉備高原の一部を形成する山間部等の水とみどりに囲まれた自然環境が豊かな都市であるとともに、かつての古代吉備の中心として栄えた地域として、作山古墳や鬼ノ城、備中国分寺・国分尼寺跡等のわが国有数の歴史的文化的遺産を数多く有する都市です。一方、JR伯備線・吉備線や井原鉄道井原線等の鉄道網、国道180号や国道429号等の広域幹線道路、岡山総社インターチェンジが位置していることから、中国地方の広域交通の結節点としての役割を担っています。こうした快適性や利便性、企業や大学の誘致、さらには岡山市・倉敷市・高梁市との密接な関係等を背景に、住宅都市・学園都市としての発展もみせています。

しかし現在、わが国は人口減少社会をむかえ、少子・高齢化の一層の進展が予測されるとともに、東日本大震災以降の防災意識の高まりや地球規模での環境問題の深刻化など、様々な社会・経済情勢の変化が起こっています。このような中、都市づくり・地域づくりにおいても、人口減少を前提とした成熟社会にふさわしい、効率的な都市構造の実現が求められています。

本市では、これら新たな地域課題等に取り組むべく、「第2次総社市総合計画」を策定しました。同総合計画において、『岡山・倉敷に並ぶ新都心 総社～全国屈指の福祉文化先駆都市～』の実現に向けて、次の3つの基本理念を掲げています。

「困っている仲間を支えよう!」「子どもと仲間を増やそう!」「仲間と力を合わせよう!」

この基本理念のもと、「住み」「働き」「学び」「訪れ」「集い」の5つの「したくなる」まちを創るとしています。都市計画マスタープランにおいて、同総合計画を踏まえ、基本理念を次のように定めます。

5つの「したくなる」都市づくり

『だれもが住みたくなる都市づくり』

～豊かな自然環境等との共生に配慮しつつ、誰もが安全、便利で快適に暮らせる都市づくり・地域づくりを進めます。

『だれもが働きたくなる都市づくり』

～広域交通の利便性を活かした産業振興による雇用環境の確保と人口定着を図る、豊かで活力ある都市づくり・地域づくりを進めます。

『だれもが学びたくなる都市づくり』

～子どもを安心して育てられる環境づくりとともに、地域の自然や歴史文化を継承し、郷土愛を育む都市づくり・地域づくりを進めます。

『だれもが訪れたくなる都市づくり』

～観光や産業の振興、交通の充実等を通じ、多様な人々や物、情報が交流する、魅力的で活気のある都市づくり・地域づくりを進めます。

『だれもが集いたくなる都市づくり』

～市民と行政との協働、周辺市町や大学等の多様な主体との広域連携等により、ともに創る都市づくり・地域づくりを進めます。

(2) 将来都市像

本市の将来都市像は、「第2次総社市総合計画」に即して次のとおりとします。

目指すべき将来の都市のすがた(イメージ)

岡山・倉敷に並ぶ新都心 総社
～全国屈指の福祉文化先駆都市～

歴史に培われた吉備文化と、高梁川の恵みをはじめとする豊かな自然環境を背景に、市民一人ひとりが幸せに暮らせる福祉文化のまちとして、幼児から高齢者まで、障がいの有無などにかかわらず、基本的な都市機能・サービスを享受し、生活利便性が高く、歴史的景観や自然と調和した快適に暮らせる空間が形成されています。

J R 総社駅から J R 東総社駅周辺や総社駅前線沿道等の市街地中心部では、ユニバーサルデザインの都市空間が整備され、歩いて暮らせる範囲で買い物や娯楽、文化的活動が楽しめ、日常生活サービスも受けられるなど利便性が確保され、来訪者も含めた多様な人々が交流するにぎわいのある空間であり、県内外からの公共交通によるアクセスも容易です。

市街化区域内には、ゆとりとうるおいのある住宅地が展開し、安心して安全に暮らせる良好な住環境と地域コミュニティが保たれ、まちなかで快適に暮らせる良好な住宅市街地が形成されています。市街地中心部の周辺には、教育・文化施設やスポーツ・レクリエーション施設、さらに市民の誇りとなる自然環境や歴史的文化的遺産を活かした観光施設等が充実し、J R 服部駅・岡山県立大学周辺は、本市の東の玄関口となる交流とにぎわいある地域拠点として、市外から多くの来訪者を迎え入れています。

郊外の工業団地や岡山自動車道岡山総社インターチェンジ周辺には、環境に配慮した優良企業や広域交通ネットワークを活かした流通施設等が立地しており、本市経済の基盤であり、市民等の就業の場となっています。

市街化調整区域の平野部には、まとまりのある優良農地が広がり、穏やかで美しい田園景観が残されています。公共交通による市街地中心部とのアクセスも良好であり、生活環境や地域コミュニティも充実しています。

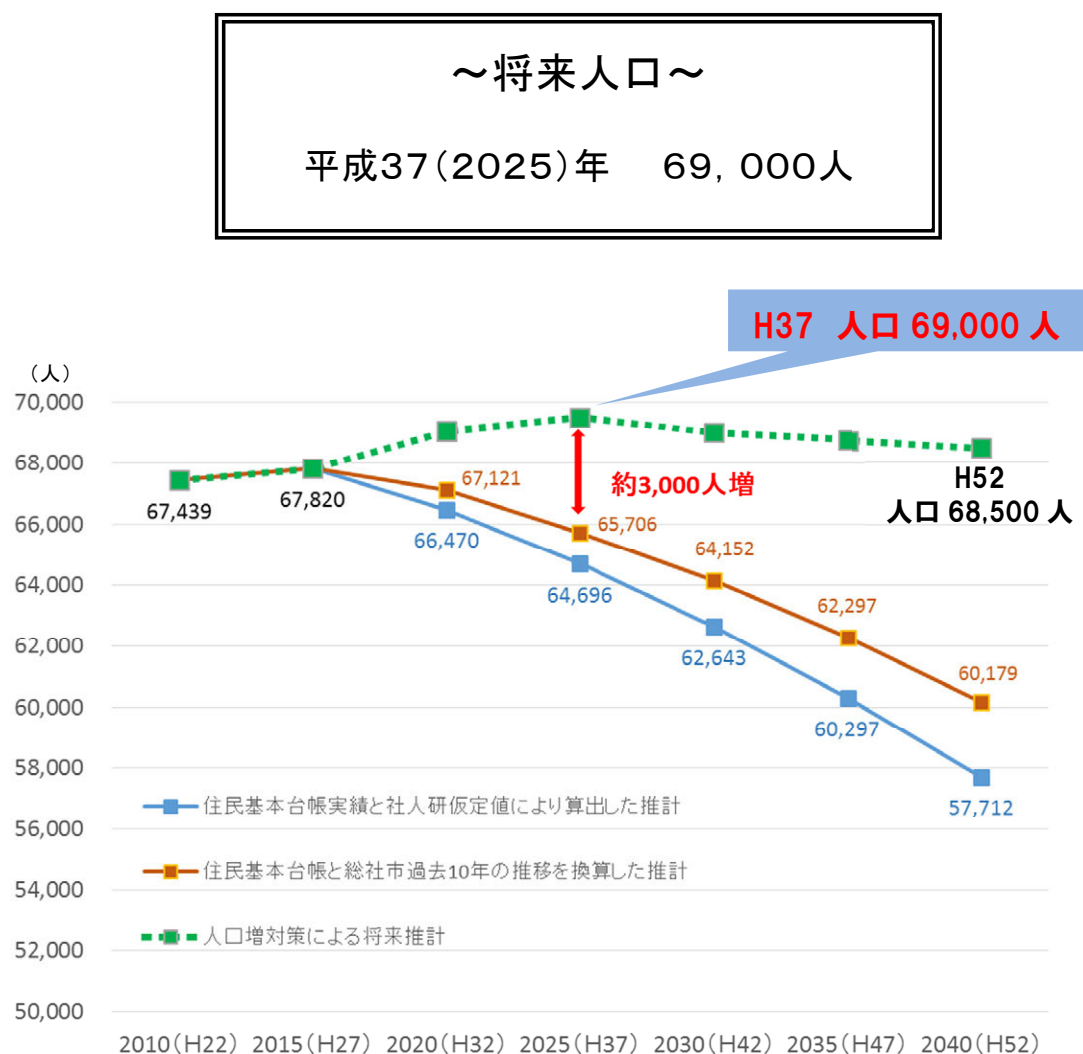
山間部では、緑豊かな森林や高梁川、槇谷川等の清流、そして名勝豪溪といった、都市部には見られない貴重な自然環境が保全されています。そして、これらの自然資源とふれあい、楽しめるレクリエーション空間も整備されています。

市民は、良好な住環境の創出や地域景観の保全に関する地域活動に自ら積極的に参加・協力しているなど、都市づくり・地域づくりに高い意識を持っています。また、豊かな自然環境や田園景観、地域固有の歴史的文化的遺産等との共生に配慮しながらこれらを守り育て、次世代に継承していく風土が醸成されています。

1-2 人口フレーム（将来人口の設定）

本市の人口は、平成 22（2010）年 3 月末時点で 67,439 人（総社市調べ）でしたが、平成 27（2015）年 3 月末時点では 67,820 人（総社市調べ）と微増で推移しています。

全国的には人口減少が予測される中、本市では雇用機会の確保や子育て環境の充実、移住・定住のための住環境の向上等による転出抑制及び出生者数の向上、学生市内居住者の確保、移住・定住の促進等を図ることを前提に、現状からの人口増または維持を図るとする「第 2 次総社市総合計画」に即して、本計画における目標人口を平成 37（2025）年時点で 69,000 人と設定します。



【総人口の推移予測】

資料：第 2 次総社市総合計画

1-3 都市づくりのテーマと基本目標

将来の人口減少、超高齢社会の進展が予測されている中、将来都市像の実現や目標人口の達成に向けては、住民の暮らしや働く場をいかに維持していくかが課題となります。

このため、以下に示す都市づくりのテーマのもと、既存の都市機能の集積を活かしながら、まちなかの人口密度の維持と計画的かつ適正に都市機能が集積・配置された集約型都市構造を実現し、本市固有の伝統文化や豊かな自然環境・歴史的景観、産業や地域コミュニティを地域資源として活かしながら、活力ある都市づくりを進めます。

都市づくりのテーマ

地域・文化・自然が共生する、
効率的で安全・快適な活力ある生活交流都市

都市づくりのテーマを踏まえ、基本目標を次のように定めます。

(1) 将来の人口減少と超高齢社会に対応した都市づくり

本市の人口は近年横ばいで推移し、市街地中心部周辺（人口集中地区）の人口密度は、長期的にほぼ一定の水準が維持され、人口や都市機能が集積する暮らしやすい都市環境が形成されています。しかし、市街地中心部の一部の地区では、人口密度の低下や高齢化の進行が見られており、将来の人口減少と超高齢社会においては、現在の生活水準をいかに維持していくかが課題となります。

このため、無秩序な市街地の拡大は抑制しつつ、既存の都市機能の集積を活かすことによってまちなかの人口密度を維持し、計画的かつ適正に都市機能が集積・配置された集約型都市構造の実現を目指します。

① まちなかの人口密度が一定に維持される都市づくり

近年、市街地中心部の一部の地区の人口密度は低下傾向にあり、また虫食いで非効率な土地利用が多く見られるなど、空洞化が課題となっています。

このため、市街地中心部における土地の高度利用や低未利用地の有効利用、空き家を活用した居住促進など、ハード・ソフト両面から積極的にまちなか居住を誘導し、人口密度が一定に維持される都市づくりを目指します。

② 中枢的な拠点から地域の生活拠点まで多様な暮らしを支える重層的な都市づくり

市街地中心部周辺や郊外においては、鉄道駅周辺など既に形成されている拠点性の高い地域が立地するほか、集落が各地に点在しますが、将来の人口減少・超高齢社会において、小規模な集落より商店や診療所が撤退するなど地域の衰退が進展することが懸念され、生活圏レベルでの日常生活に必要な機能をいかに維持していくかが課題となります。

このため、地域の特性や生活圏に応じ、中枢的な拠点から地域の生活維持に必要な拠点まで多様な拠点を構築し連携することで、人々が集い、交流する機会を創出し、多様な人々の暮らしを支える重層的な都市づくりを目指します。

③ 産業振興により人口定着・定住を促進する活力ある都市づくり

本市は広域交通ネットワークの利便性の良さから、工業・流通施設等の土地利用の需要が高まりをみせているものの、現在の市街化区域内では、企業誘致に適した一定規模かつ整形の土地が確保できないことが課題となっています。

このため、非効率な土地利用や無秩序な市街地の拡大を抑制することを念頭に、地区計画等により産業施設の計画的な立地誘導を推進し、産業振興による雇用環境の確保を図り、人口定着・定住を促進する活力ある都市づくりを目指します。

④ 公共交通を介して地域が連携する多極ネットワーク型の都市づくり

20年後には市民の約3人に1人は高齢者になると予測され、これまで以上に買い物や通院等における移動がしづらくなることが懸念されており、集約型都市構造の実現に向けては、定住や活動の場となる地域間の公共交通等による移動手段をいかに確保していくかが課題となっています。

このため、市内を快適に移動でき、市民の足として多くの人に利用されるよう、公共交通のサービスの充実や質の向上を図り、公共交通を介して市街地中心部と各拠点が連携する多極ネットワーク型の都市づくりを目指します。

⑤ 都市施設の効率的な維持管理・長寿命化の推進による持続可能な都市づくり

本市の公園や下水道等の都市施設は30年以上経過したものが多く、老朽化や耐震化対策など、今後大規模改修や建替えの時期を迎えることになります。人口減少による税収の落ち込みや高齢化による社会保障費の増大のもとでは、これら都市施設の維持・更新費用の確保が困難となり、公共サービスの質の低下を招くことが懸念されます。

このため、計画的かつ効率的な維持管理によって都市施設の長寿命化を図るとともに、施設の再編や供給エリアの見直し等のもと、長期にわたって都市基盤施設が維持され快適に利用できる、持続可能な都市づくりを目指します。

(2) 誰もが安全・安心に暮らせる都市づくり

- ・ 東日本大震災等、近年多発する自然災害により、市民の防災に対する意識は高まっています。これらの自然災害による被害の防止・軽減を図るため、道路拡幅や治山・治水の推進、防災関連施設の充実、建築物の耐震化や不燃化の促進を図り、安全で強靱な都市基盤を構築します。
- ・ 将来の超高齢化社会の進展を見据え、ユニバーサルデザインの考え方を踏まえた高齢者や妊婦、乳幼児同伴者などが移動しやすい、バリアフリー化された空間の創出を図り、誰もが安全・安心に暮らせる都市づくりを目指します。

（３）地域資源の活用と環境負荷低減による魅力的な都市づくり

- ・ 本市は、市域中央を貫流する高梁川をはじめとする河川や流域に広がる平野部、北部の山間部や南部の丘陵地などの豊かな自然環境や備中国分寺等の多くの歴史的文化的遺産を有しており、これらを背景とした田園景観、里山景観がかたちづくられています。こうした、本市固有の貴重な自然環境や歴史的文化的遺産を次世代に継承し守り育てるとともに、景観資源・観光資源として、これらの地域資源を活用した魅力的な都市づくりを目指します。
- ・ 公共交通の利用の促進や再生可能エネルギーの普及等を図り、環境負荷の少ない都市づくりを目指します。
- ・ 市街地中心部及び周辺には多くの緑地や農地が存在していますが、近年の防災に対する市民意識を踏まえ、防災空間の確保や良好な景観の形成など、都市における緑地や農地の持つ多様な機能に対する評価が高まっています。このため、市街地中心部及び周辺における緑地や農地の多様な機能に注目し、まちなかの緑地、農地の適切な保存・活用を図ることで、都市と緑・農が共生する、良好な市街地環境が形成される都市づくりを目指します。

（４）市民との協働、広域連携による都市づくり

- ・ 都市計画マスタープランの内容の周知や都市づくりに関する情報提供等を行い、市民の理解・関心を高めるとともに、市民による都市づくりの活動に対する支援や参画を促進するための仕組みを検討し、市民と行政との協働による都市づくりを目指します。
- ・ 将来の人口減少に対応した効率的な都市運営を行うにあたり、周辺市町が地域の特性にあわせた役割分担のもと、互いに支えあう広域連携による都市づくりを目指します。

１－４ 将来都市構造の基本方向

将来都市構造とは、まちの将来都市像を実現するため、都市づくりの基本となる「将来のまちの骨格のイメージ」を示したものです。

本市の将来都市構造は、土地の状態や用途により面的な広がりを持つ「エリア」、都市活動や市民生活の中心となる点的な場所や地区である「拠点」、及び道路や鉄道、河川など線的なつながりを形成する「軸」により構成されます。

（１）構成するエリア

① 山間部のエリア

市域北部の山間部は、高梁川、槇谷川等の河川や森林等の優れた自然環境が残されているため、将来にわたり、農林業の振興と併せて自然環境の保全に努め、水と緑を活かした観光・レクリエーションの振興を図ります。そして、美袋をはじめとする集落地において生活環境の向上を図ります。

② 丘陵部のエリア

吉備平野の背景となる高梁川、砂川や吉備史跡県立自然公園、吉備路風土記の丘県立自然公園等の自然及び歴史的文化的遺産を多く有する丘陵部は、これまで本市独自の里山景観や歴史的景観をかたちづくってきました。また、吉備路自転車道沿線にある備中国分寺、作山古墳等の歴史的文化的遺産は、本市における観光やレクリエーションの中心として、多くの来訪者を迎えています。

このことから丘陵部は、良好な自然環境の保全に努め、観光やレクリエーションの中心となる地域として、うるおいと個性ある景観の形成を図ります。

③ 平野部のエリア

平野部は、都市形成エリア及び田園環境保全エリアで構成されます。

ア. 都市形成エリア

J R総社駅からJ R清音駅にかけての高梁川左岸側、及びJ R総社駅以東の国道180号周辺に広がる都市形成エリアは、市街地が形成され、特にJ R総社駅を中心とする一帯には行政、文化、福祉、学術施設等の公共的施設や商業・業務施設等が集積し、これまで本市の「顔」「玄関口」として発展してきました。

また、エリアの東部には広域交通網として、岡山総社インターチェンジが立地し、山陽自動車道、中国自動車道にも直結するという企業立地や物流環境からみて恵まれた位置にあります。さらに、国道180号総社バイパスの道路整備に伴い、通過交通を含む道路利用者の増加が期待されています。

今後、都市形成エリアは広域的位置づけから、岡山県南広域都市計画区域における区域北部の地域都市拠点としての拠点性を担う必要があるため、より一層都市機能の充実・強化を図り、商業・業務地の活性化、市街地中心部における土地の高度利用や低未利用地の有効利用、空き家を活用した居住促進等、まちなか居住を推進するための居住環境の向上を進めます。

また、J R清音駅やJ R服部駅周辺地域にあつては、近接する住宅地や産業施設、大学等との関係を踏まえた今後の開発動向とともに、人口減少・超高齢社会の進展等による都市環境や地域ニーズの変化等を見据えた、秩序ある市街地の形成を図ります。

イ. 田園環境保全エリア

山間部や丘陵部の南に東西に広がる吉備平野では、都市形成エリアを除いて一帯に農用地が広がり、点在する集落地と一体となって、良好な田園景観を醸し出しています。農用地では、生産性の高い農業を目指してほ場整備も進められています。

田園環境保全エリアでは、今後も優良な農用地の保全を図ることにより農業振興に努め、本市の産業の一翼を担っていくとともに、集落地においては、生活道路、下水道等の整備を進め、生活環境の改善を図ります。

また、幹線道路沿道においては、無秩序な立地とならぬよう、周辺環境と調和を図りながら、秩序ある土地利用を誘導していきます。

（２）構成する拠点

① 都市核

J R 総社駅及び J R 東総社駅周辺や総社駅前線沿道等については、商業・業務を核に据えた都市機能の集積・強化を図る都市核として位置づけ、今後も都市施設の整備を効率的かつ効果的に進め、まちなか居住を推進し活気とにぎわいのある都市核にふさわしい拠点づくりを図ります。

② 地域拠点

都市核とともに、その周辺部や郊外において既に形成されている拠点性の高い地域として、J R 清音駅周辺地域、J R 服部駅・岡山県立大学周辺地域、J R 美袋駅周辺地域を地域拠点と位置付けます。

集約型都市構造の形成に向けて、地域拠点では、既存の都市施設や公共施設等の有効活用を図りながら、都市機能の効率的な集積や居住の誘導、公共交通サービスの充実等を図り、都市核と各地が連携する多極ネットワークの結節点として生活、交通利便性の維持向上を図ります。

③ 工業・流通拠点

現在の用途地域指定での工業系用途地域及び本市北西部の日羽地区、富原地区、岡山総社インターチェンジ周辺の長良地区、赤浜地区等の既存の工業地やその周辺を工業・流通の拠点として位置づけ機能強化を図るとともに、地域特性を活かした産業経済基盤の構築を図ります。

（３）構成する軸

① 産業活性化軸

国道 180 号、国道 180 号総社バイパス、国道 429 号、（都）東総社中原線、国道 486 号及び主要地方道上高末総社線で構成され、都市核を中心に岡山総社インターチェンジと久代地区の工業団地（ウイングバレイ西工業団地）とを結ぶ東西方向を、都市の活力を支える産業や生活利便施設の誘導を図る軸として、都市核（市街地中心部）と産業集積地（工業・流通拠点、沿道型商業・業務）をつなぐ「産業活性化軸」と位置付けます。

② 都市軸

本市に隣接する岡山市や倉敷市、高梁市に通じる主要幹線道路及び J R 線を、本市の広域連携を形成、強化する都市軸と位置付けます。

ア．総社－岡山都市軸

国道 180 号、国道 180 号総社バイパス、J R 吉備線で構成され、本市と岡山市とを結ぶ東西方向の主要都市軸として、工業・流通施設の誘導や沿道の土地利用についての検討を行い、人・物・情報が行き交う「総社－岡山都市軸」の形成を図ります。

イ. 総社－倉敷都市軸

国道 429 号，国道 486 号，（都）総社真備船穂線，主要地方道倉敷清音線，ＪＲ伯備線で構成され，本市と倉敷市とを結ぶ南北方向の主要都市軸として，産業，観光等を通じ交流を生み出す「総社－倉敷都市軸」の形成を図ります。

ウ. 総社－高梁都市軸

国道 180 号，国道 180 号総社バイパス，ＪＲ伯備線で構成され，本市と高梁市とを結ぶ西北方向の主要都市軸として，水と緑にあふれた「総社－高梁都市軸」の形成を図ります。

③ 地域間連携軸

各エリアや地域拠点，及び一部隣接市町を結ぶ軸として，一般県道清音真金線，主要地方道上高末総社線，主要地方道倉敷美袋線，主要地方道総社賀陽線等を中心に，市域内における連携の強化と都市軸へのアクセス強化に向けた地域間連携軸の形成を図ります。

④ 都市機能軸

本市の豊かな自然環境を形成する河川，及び歴史的文化的遺産をつなぐ道路を都市機能軸と位置付けます。

ア. 水と緑のアメニティ※軸

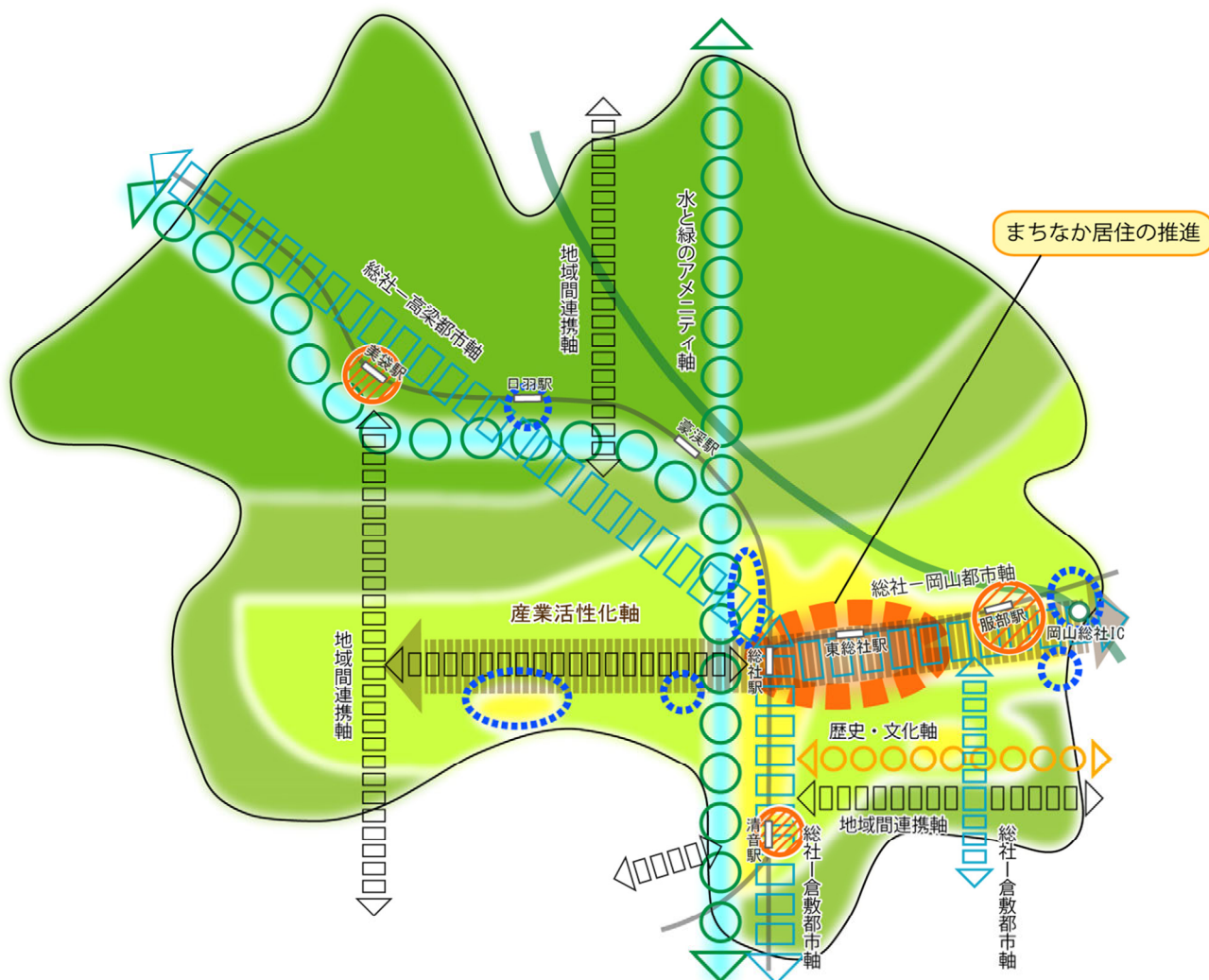
岡山県下 3 大河川の一つであり，本市の自然環境を代表する高梁川とその支流で名勝豪溪を有する榎谷川については，人々が自然とふれあい，共生するシンボルとして，水と緑のアメニティ軸の形成を図ります。

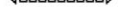
※アメニティ：「快適性，快適環境」と訳されます。ここでは，人々の生活とそれととりまく自然環境等との間に調和が保たれていることによる快適さを意味しています。

イ. 歴史・文化軸

吉備路風土記の丘県立自然公園周辺において，一般県道清音真金線，吉備路自転車道を中心とした歴史・文化軸の形成を目指します。また，本市から岡山市の造山古墳，吉備津神社，吉備津彦神社も視野に入れた軸の形成を図ります。

【将来都市構造図】



凡		例	
 山間部のエリア	  	 産業活性化軸	
 丘陵部のエリア		 都市軸	
 都市形成エリア		 地域間連携軸	
 田園環境保全エリア		 水と緑のアメニティ軸	
 平野部の エリア		 歴史・文化軸	
		 高速自動車道	
		 鉄道	